

「看板建築」考

きむらたかし@三田用水

「看板建築」の概念

「建築探偵」や「トマソン」といった「研究」、あるいは「ニラハウス」などの設計で有名な東京大学生産技術研究所の藤森照信教授が、大学院生時代に日本建築学会での発表時に提唱した、建築様式の問題である。

藤森照信

看板建築の概念について：近代日本都市・建築史の研究14

学術講演梗概集. 計画系 50(建築歴史・建築意匠), 1573-1574

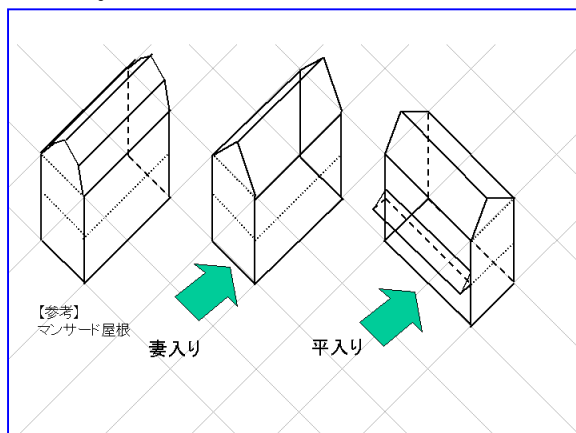
1975 社団法人日本建築学会・刊

もっとも、このコトバの発案者は、藤森教授ではなく、当時生産研に在籍していた（後に文化庁）堀勇良氏とのことである（*前掲論文註2）。

残念ながら、この発表は、当時の学会の大勢からは不評で、とうとう、いわゆる「術語」として認知されなかったものの、一部には熱狂的な支持者もいたとみえて一般社会では連綿と生き残っている。

看板建築を生んだ建築技術的要因

商家の場合、店の間口を、建物の桁行方向にとるか（平入り）、梁間方向にとるか（妻入り）という問題がある。



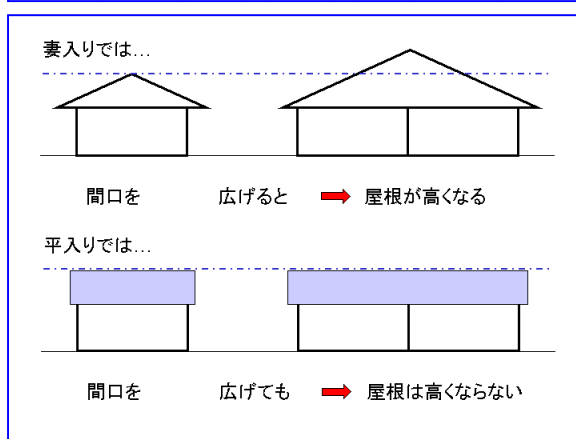
しかし、妻入りの場合、間口を広くしようとしても、雨の多い日本では一定の屋根の勾配が必要なので屋根が大きくなってしまふ。

したがって、間口を広げようとするれば、平入りの方が適している（ただし、伊勢のまちは、神宮が平入りのため、これに遠慮して大規模な建物も妻入りとしているので有名である。また、町工場など、もともと屋根を高くする必要がある場合には、妻入りの方が建物の規模を大きく見せる効果

がある）。

これに対し、妻入りの間口の広い建物を看板建築にしようとするれば、屋根を隠すために、看板部分の高さが異様に高くなる、という問題が生ずる。

また、看板建築の看板の裏側は、そのままでは、屋根を流れ落ちできた雨水が溜まることになるので、看板の裏側の部分に、雨を看板部分の外（道路から見て奥側）に誘導する工夫（雨仕舞い）が必要になるが、この雨仕舞いについては、実例を調べる限り、妻入のほうが規模が小さくて済み、その意味で容易なようである。



つまり、間口の広い店にしたければ、平入りの方が合理的である反面、看板建築にはしにくい。

看板建築の多くが、間口の狭い妻入りの建物なのは、このような、構造と雨仕舞いの両面からの、建築技術上の制約によるものともいえるし、むしろ、間口の狭さを逆手にとった仕様といってもよい。

「目立つ建物」志向

一般住宅ならともかく、商家であれば、人目につかないよりは人目につく建物としたいのは、少なくとも関東では人情である。

間口が広い平入りの建物では、それ自体が装飾的ともいえる出桁造りにしつらえることができるし、確立された工法だけに大工にとっても建てるのは容易だし、それだけで豪勢に見える。

それに対して、間口が狭く、しかも、そのままでは間口に装飾的な要素を作りにくい妻入りの建物は、どうしても地味と言うかむしろ貧相に見えるため、何か「目立つ要素」をと考えるのは自然ともいえる（その意味で、藤森論文のように、従来の出桁造りの商家の延長線上に看板建築を据えることは、一種の「現象」を論じることにはなっても、建築史的にはやや無理があるように思われる）。

どこかで読んだ記憶があるが、人は「のっぺらぼう」の空間や平面を見ると、なにか埋めてみたくなる習性があるらしい

昭和もまだはじめ、しかも普通の街場の板金屋さんや左官さんがそれをするとなれば、やはり和モノのデザインになるのは、自然の流れだろう

しかし…

左官屋さんとはともかく、板金さんは、いったい、何をお手本やベースにして、あのデザインと技法を編み出したのだろうか。

探求すべきテーマである。